よりあいつうしん

～ 人間らしく生きる権利 ～

国民主権・平和主義とともに、基本的人権の尊重は憲法の三大原理の一つであり、国民全てに与えられた人としての権利である。
そしてそれは、私達福岡ひかり福祉会の職員が最も大切にしている、支援の核となるものでもある。
これはある一人のお年寄りから、改めてその大切さを教わった実践の記録である。

２０号

発行元
よりあいの森
つうしん課
〒814-0104
福岡市城南区別府
7丁目9-22
☎092-845-0707

《出会い》

奥山洋子さん。九十七歳。宅老所よりあいに通われるようになったのは三年前の冬である。

上品な衣服に身を纏い、肩にかかる程の白く長い髪は頭の後ろで可愛くお団子に結われ、マシュマロのように白く柔らかそうなその肌には、綺麗にお化粧がなされてあった。

しかしながら、気品溢れる優美な姿とは反対に、強張った表情で周りを見わたすその姿は、どこか私たちの事を警戒しているようにも感じられた。それは奥山さんがよりあいに通われる事となった経緯を知っていたからなのかもしれない。

奥山さんはそれまで通われていた施設で、暴力的な振る舞いや自傷行為が見られたため、精神科へ入院されることになった。病院へ着くと男性看護師数人から押さえつけられ、隔離された部屋へと閉じ込められた。そこでの奥山さんの暮らしは、自傷行為があるからという理由で手足を紐で縛られ、食事は無理やり口に入れさせられるといったものだった。奥山さんは「毒を盛られている」

と、食べた物を全て吐き出し、体重はみるみる減少していった。

そんな状況を見かねた娘さんは、

「一刻も早く家に連れて帰らなければ母は死んでしまう」

と思い、自宅で介護ができる環境が整わないまま奥山さんを連れて帰ったのだ。

そのような経緯の中、よりあいに通われる事となったのだが、私達がまずしなければならなかったのは、『奥山さんの人権を守る』という姿勢で関わる事だった。

人として奥山さんと向き合い、敬意をもって接する。そして、奥山さんの『人間らしく生きる権利』を保障するという関わり方を、奥山さんとご家族に受け入れてもらう所から始まった。

《関係作り》

まず私達が徹底したのは『奥山さんの嫌がる事はしない』という事だった。奥山さんは男性数人から押さえつけられた経験から、男性に対して恐怖心を持たれていた。

そこで最初は女性職員が中心となり関係作りをしていくことにした。女性職員がお迎えに行き、側に座って一緒に過ごす。一日の始まりから終わりまでを女性職員が付き合うことにした。お迎えに行った後、車から降りたくなければ車の中で一緒に過ごし、外に出て行かれれば止めることなく一緒について行く。混乱され、大声で叫びながら何かを訴えてある時は、その訴えに耳を傾け、混乱に丁寧に向き合う。その都度変わる奥山さんの気分に合わせて日々を過ごしていった。トイレにお誘いしても

「行きたくない」

と言われれば、それ以上踏み込まない。なかなかトイレに寄れず、パットが濡れている事は明らかな時でもそのまま自宅へお送りすることもあった。ご家族には

「まずは関係作りを優先したい。奥山さんによりあいを受け入れてもらえるまでは、嫌がる事には踏み込みたくない」

という事をお伝えすると、ご家族は理解して下さった。

そんな暮らしを続けていくと、奥山さんの表情や様子に変化が見られるようになった。固い表情で、よそよそしかった奥山さんだが、笑顔が格段に増え、歌を披露されたり、おどけた顔で職員を笑わせたりとチャーミングな一面も見せてくれるようになった。男性職員を恐がることは無くなり、送迎やトイレの介入までを委ねてくれるようになっていった。よりあいの事を受け入れてくれているのかな？そう感じる出来事が日に日に増えていったのだった。

《社会と繋がる》

奥山さんがよりあいの事を受け入れつつあった。しかしそれと同時に、奥山さんの事を社会が受け入れてくれなければならない。よりあいに繋がる事は奥山さんにとって小さな社会と繋がる事であり、他のお年寄りから冷たい目で見られてしまうと、それは社会的に受け入れられていないのと一緒である。

そのため私達は場の調整をしていく事が必要だった。

『食事中は静かに』と言われるお年寄りがいる。しかし奥山さんは食事中だろうと歌いたくなったら歌うのだ。満面の笑みを浮かべながら

「歌いましょうか」

と言って歌い出す奥山さん。綺麗な歌声が木造の建物に響き渡った次の瞬間、

「うるさいですよ。食事中は静かに」

とそのお年寄りが注意をした。それでも構うことなく歌い続ける奥山さん。注意したお年寄りは苛立ちの表情を見せる。職員はどうすればいいのか分からないまま、とりあえず奥山さんと一緒に歌ってみた。すると

「あなた（職員）音がずれているわよ。あの方（奥山さん）は綺麗な声ね。上手」

と職員の音痴が偶然にも功を奏し、奥山さんの歌声を褒め出したのだ。

奥山さんの個性が、他のお年寄りから悪い印象を持たれないように場を調整していく。職員がどのようにフォローすれば、奥山さんの魅力が他のお年寄りに伝わるのか、終礼やミーティングで、上手くいった事、失敗した事をその都度確認し、アイディアを出し合っていくうちに、少しずつ場の調整ができるようになっていったと思う。

《職員の葛藤》

しかしながらすべてが順調に進んだわけではない。むしろ葛藤の連続だった様に思う。『奥山さんの嫌がる事はしない』そう決めたにも関わらず、そうせざるを得ない状況が多々あったのだ。

吐く息も白く見える、ある寒い日の出来事である。奥山さんが縁側へと出て行き、下駄箱の前で横になり寝てしまった。職員が声を掛ける。

「寒いから中で寝ましょう」

と。しかし奥山さんは

「うるさい」

と聞く耳を持ってくれない。体に触れると

「何するの！触らないで！」

と怒鳴られる。しかしこのまま外で寝てしまっては風邪を引いてしまう。職員は二人で抱えて部屋に移動することにした。

そっと奥山さんの両脇と膝を抱えた瞬間、奥山さんは今まで見せたことのない鬼の形相で職員を睨み付けた。そして

「殺す気かー！」

と叫び始めたのである。激しく混乱する奥山さんは、二人に抱えられて部屋へ移動した後も、しばらく叫び続けていた。次第に落ち着きを取り戻したが、今度は哀しげな表情で職員を見つめ

「何で私をいじめるの？」

と問いかけたのだ。職員はそんな奥山さんの姿を見て、ただ

「ごめんなさい」

と謝る事しか出来なかった。

奥山さんが怒る事は予想していた。寒空の下で寝てしまった奥山さんを二人で抱えて部屋に移動した事は間違っていたとも思わない。しかし「なんで私をいじめるの？」

そう言われた時、とてつもない罪悪感に襲われたのだ。奥山さんのためと思ってやむを得ず行った事でも、奥山さんにとってはいらぬ世話でしかなかった。

そのような事があるたびに私達は、『安全のため』という理由でどこまで介入すべきなのか、安全を重視するあまり、行動を制限してはいないだろうか、尊厳を傷つけてはいないだろうか、と心の中で葛藤していた。

そして悩んだ時にはその日の内に職員間で話し合い、その対応がどうだったのかをみんなで確認するように心掛けていた。

《ご家族と一緒に》

奥山さんの事を誰よりも支えてこられたのは言うまでもなくご家族の方々である。その献身的なご家族の頑張りに私達が突き動かされた部分は大きい。そしてご家族と一緒に悩みや喜びを共有できたことが、私達の支えにもなっていた。

よりあいで楽しく過ごせた時、奥山さんのひょうきんな一面が見られた時、便秘が解消された時、夏になかなかお風呂に入れず、二週間ぶりにやっと入ることができた時、その時々でご家族と一緒に悩みや喜びを分かち合っていた。

そんなご家族だったからこそ、奥山さんが一番大変だった時期に全力でサポートすることができたように思う。ご家族との間に信頼関係がなければ、支援の幅を広げることはできなかったかもしれない。

家族会での事である。娘さんから

「母が夜寝ないので、自分たちも一睡もできていない」

との話を伺った。その話を聞いた職員はその場ですぐ

「今日はよりあいに泊まる事にしましょう」

と提案をした。そしてその日、奥山さんは急遽よりあいに泊まることになった。それからは定期的に泊まる事でご家族の介護負担を減らし、在宅生活を支えていく事に決めた。後に娘さんは

「あの一言が無かったら、私達はどうなっていたか分からない。あの時の一言に本当に救われた」

と話して下さった。

《学んだこと》

奥山さんとの日々の中で、私達は大切な事を教わった。

尊厳とは何か？その人らしさとは何か？認知症やぼけが深まるにつれ、それらが軽視されてしまいがちな今の世の中で、私達が守るべきものを実践の中で明確にしてくれた。

専門職としての正しい知識や技術はもちろん必要だが、それだけでは奥山さんを支えることは出来なかったと思う。奥山さんが何に怒り、何に喜び、何を求めているのか。真摯に向き合い、関係作りをしたからこそ見えてきた部分が、支援をしていく上で何よりも大切だったと感じている。

奥山さんから教わった事を忘れずに、これからの支援に活かしていきたい。

そんな奥山さんは現在、よりあいの森で新たな生活をスタートさせている。これからもその個性を存分に発揮しながら、よりあいの森で元気に暮らして欲しい。

宅老所よりあい　堀　正晴

よりあいLINEスタンプ
好評発売中

よりあいの職員が「あーでもない、こーでもない」と言いながら何度も会議を重ね、すべて一から作り上げたラインスタンプ。かわいいデザインで、ついつい送りたくなってしまうスタンプがいっぱい。ぜひ、お買い求めください！！

https://store.line.me/stickershop/product/12690131

台湾からよりあいへ

葛　芝　岑　さん
～　Katu Shishin　～

４月より１年間共に働いた葛芝岑さんが、この度退職され、台湾へ帰国されました。

葛さんのお母様は、台湾で介護施設を経営されており、その影響もあって、自身も介護の道へと進む決心をされました。

台湾よりも先に高齢化社会を迎えていた日本で、先駆的な介護技術と知識を学び、経験を積むために来福されました。

日本語の専門学校に半年間通い、その後介護の専門学校に３年間、そして縁あってよりあいの森に就職されました。（介護福祉士の国家資格も日本で取得されたんですよ！！頭が下がります！！）

そんな一生懸命で、何事にも明るく前向に挑戦し、熱い想いを持った葛さんとの１年を振り返っていきたいと思います。

葛さんのご実家の施設のホームページ

です。ぜひ、ご覧ください。

台湾社団法人雲林県老人長期ケア協会付属小太陽老人デイサービスセンター

http://www.careold.org.tw

葛さんへの質問？

よりあいの森で学んだことは？

最期を迎える日まで、その人らしさを大切にできる実践に取り組めていたところです。

一人一人のお年寄りが、家族、馴染みのお年寄り、職員、みんなに囲まれ、とても穏やかに寿命を迎えていました。

そして、家族と一緒に、最期のお風呂に入れたことが一番印象に残っています。とても貴重な経験でした。

この経験をもとに、台湾でも、一人一人の尊厳ある最期の迎え方について話し、実践に繋げていくことができれば良いなと思っています。

台湾に帰ってやりたいことは？

お年寄り一人一人が、こちらで決めたその日の日課やスケジュールで暮らすのではなく、それぞれのペースで暮らしていける場をつくりたいと思っています。

また、日本の介護現場で学んだことを、台湾の次世代に伝えていく立場になりたいです。先生になるには資格を取得しないといけませんが・・・（汗）。

今は、福祉の魅力を伝えたい、発信したい思いで溢れています！

そして、福祉面で国際協力を積極的にしていきたいです。

目標を達成するには、難しいことがたくさんあるとは思いますが、頑張って乗り越えていきたいです！

納涼祭に向けて試作品作りに励む葛さん。お年寄りからアドバイスを頂いています。

お年寄りとのドライブも、いろいろな所へ行きました。

納涼祭に出店した台湾屋台は、たくさんのお客さんに来ていただき大盛況でした。

葛さん、台湾でも加油（ジャーヨウ）！

編集後記

ソーシャルディスタンス。

連日のテレビのニュース等で何度もこの言葉を耳にした。社会とは人と人との繋がりなしに語ることはできないと思う。

つうしんの表面でも紹介したヒロコさんも、今まさによりあいの森という社会の中で生活している。持ち前のパワフルな性格で、社会の中に風を送り続けている。

こんな時期だからこそ、外ではなく内側に目を向けてみよう。

もちろん、見えない敵には十分に注意を払いながら、お年寄りが安心して暮らせる日々を、当たり前の日常を、そして、大切な１日１日を、密に過ごしていきたいと思う。

よりあいの森
鐘ヶ江　亮一